

つながる思い、被災地へ

震災
3年

大間々北小生、手紙を託す



東日本大震災から間もなく3年。みどり市立大間々北小学校（石井逸雄校長）の5、6

年生は、授業を利用して被災地の仮設住宅で暮らす人たちに宛てた手紙を書いた。どうすれば被災者の気持ちに寄り添えるのか。子どもたちは「がんばれ」の声を抑え、親戚に手紙を出すような気持ちで近況を報告、温かい
.....
松井隆さんに手紙を託す大間々北小の5、6年生（同校で）

言葉を書き添えた。手紙は7日、被災地を訪れる災害支援ボランティアネットワーク桐生の松井隆代表に託され、11日に宮城県南三陸町歌津地区の住民に届けられる。

手紙を書いたのは、同校の5年生51人と6年生70人。ボランティアについて語った松井さんの講演をきっかけに、自分たちができることは何か児童らは考え、教諭からのアドバイスを受けつつ励ましの手紙をしたためた。同校では昨年度も、当時の5年生が励ましの手紙を書いており、松井さんらの手を通じて南三陸町の小学校に届けた経緯がある。「今

回は被災地の仮設で暮らす人たちに届けた。仮設暮らしが長期化し、気持ちが悪く落ち込んでいる人もいます。現地の人から話を聞いたので」と、松井さんは話す。

7日、「よろしくお願

いします」の声とともに、子どもたちから顔写真つきの手紙を託された松井さんは「みんなの気持ちをしっかりと伝えてきます」とあいさつ。6年生の小倉百合香さんと深澤舞子さん、5年生の小倉優依さんと感想。

11日に南三陸町へ
松井さんは10日、約20人のボランティアとともに被災地を訪れ、11日には南三陸町歌津地区の仮設で暮らす人びとの元に手紙を届ける予定だ。